

イスラム教への改宗と「祖国」

フィリピン系アメリカ人二世を事例として

立命館大学文学部非常勤講師 木下 昭

1 目的

2001年9月11日の同時多発テロ以降、アメリカ社会におけるイスラム教徒(アメリカン・ムスリム)の位置には、大きな関心が寄せられてきた。これは、イスラム教徒とアメリカとの対立という単純な図式が広く受け入れられているからである。移民のアメリカン・ムスリムに関して、考慮されることが相対的に少ないのが、彼らの祖国の存在である。祖国と移民との関係は、トランスナショナルリズムとしてしばしば論じられ、移民社会を考察するうえで、無視しえなくなっている。ムスリムに関しては、その出身地がイスラム教国であることを前提として、先述の図式の中で、あくまで移民たちが担うイスラム世界の一端として扱われてきた。しかし、改宗者の増加により、イスラム教国ではない祖国を持つムスリムが現れた。彼らにとっての祖国の意味を問うことは、多様化する現代のアメリカン・ムスリムを理解する上で、欠かせなくなってきたのである。

2 方法

こうした観点で、興味深い存在が「フィリピン系アメリカ人」と称される人々に含まれるムスリムである。フィリピン系アメリカ人は現代アメリカ移民の代表的な存在であるが、彼らの祖国は人口の大部分がキリスト教徒で、イスラム教徒は5パーセント前後である。しかも、両者の間に世界で最も長きにわたる争いが、その植民地化、そして国民国家形成の過程において継続してきた。この結果、フィリピンのマジョリティには、イスラム教に対する否定的な感情が根付いたとされる。本報告では、このような祖国の存在が、フィリピン系アメリカ人たちがイスラム教に改宗するにあたって、もたらす影響とその背景を分析する。これによって、居住国アメリカとイスラム教との関係だけではとらえきれない、アメリカン・ムスリムの姿を示唆する。

具体的な研究対象は、フィリピン系アメリカ人ムスリムが中心となって設立したカリフォルニア州サンディエゴ郊外にあるモスクに直接間接に関係する、フィリピン系アメリカ人二世の改宗者である。2012年9月および2013年3月に、サンディエゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコにおいて現地調査を実施し、上記の調査対象者11名に、一対一のフォーマルな形式の半構造化インタビューを行った。加えてその周辺に位置する人々、例えば両親がイスラム教徒の二世やフィリピン系でないムスリム(14名)に対しても同様のインタビューを行った。

3 結果

フィリピン系アメリカ人のイスラム教改宗時、彼らがフィリピン系でムスリムであることの意味がさまざまな局面、例えばキリスト教徒である親との関係や「生まれつきのイスラム教徒たち」との関係で問われた。ここで重要な役割を果たしたのが、植民地化前はイスラム教がフィリピンの大部分で普及していたという言説である。この思想は、アフリカ系アメリカ人や祖国におけるイスラム教改宗者の類似した言説の影響を受けていると考えられる。さらに、このフィリピン史のイスラム教史への組み込みは、フィリピン政府による国民化政策ないし脱植民地化政策において、ムスリムをフィリピンの一部として位置付けていることとも重なる。したがって、イスラム教徒としての歴史的解釈と祖国政府による国民国家の枠組みを、アメリカ人である二世たちは、自らのエスニシティとして受け入れているのである。ここには、「アメリカン・ムスリム」でも、「フィリピン系アメリカ人」でも、表現しきれない彼らの存在が示されている。